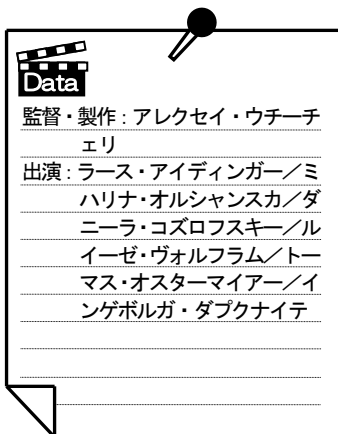




■■■ショートコメント■■■

◆中国の清王朝の最後の皇帝が愛新覚羅溥儀なら、ロシアのロマノフ王朝最後の皇帝はニコライ2世。溥儀は『ラストエンペラー』(87年)で描かれたとおりの数奇な運命をたどったが、ニコライ2世もロシア革命によって一家で処刑されることに。他方、ドイツがバッハ、モーツァルト、ベートーヴェンを生んだ国なら、ロシアはチャイコフスキーを生んだ国。音楽はもちろんのことバレエなら西欧諸国よりも上だ。

しかして、婚約者のヘッセン大公女アリックス(ルイーゼ・ヴォルフラム)がいた皇太子時代のニコライ2世(ラース・アイディンガー)に、美しいバレリーナ、マチルダ・クシェシンスカヤ(ミハリナ・オルシャンスカ)とのこんな“禁断の恋”の物語があったとは!チラシには「滅びゆく帝政ロシア。最後の皇帝が恋をしたのは、男たちを狂わす美しきバレリーナ。最大のスキャンダルにして、最大のタブーが、今、幕を上げる。」「最も切なく、最も官能的な、仕掛けられた恋。」の文字が躍っているから、こりゃ期待大!

◆朝日新聞は2018年11月28日から「ニコライ2世をたどって」の連載を10回にわたって続けたが、その第1回では本作の上映に反対するロシア正教徒を中心とした運動を紹介した。その先頭に立って注目を集めたのは、「美しすぎる検事」と日本でもネット上のアイドルとなったナタリア・ポクロンスカヤだ。

彼女は「ニコライ2世は信者にとっても神聖な存在です。映画は国から巨額な補助金を得て、その姿をゆがめた。異議申し立ては当然です」と主張している。そのターゲットとされたのは、本作では「ニコライ2世はバレリーナの恋人と裸で抱き合い、皇帝が負う権力の重責に悩む。威厳より生々しい人間性や弱さが目立つ。」ことだ。しかし、今の日本でなぜそんな連載が10回も続いていたの?

◆他方、12月6日付日経新聞の「中外時評」でも、上級論説委員池田元博が本作を取り上げていた。そして、そこでも、プーチン政権下における本作の上映反対運動を取り上げ、

「マチルダ騒動が社会に広がる閉塞感や非寛容さを映したのは確かだろう。長期化するプーチン政権による強権統治の弊害といえなくもない。」とまとめているが、それは一体なぜ？

◆さらに、本件のチランには『『アレクセイは私が尊敬する監督の一人だ。そして、誰にでも自由に発言する権利がある。』——プーチン大統領』の記載があるが、これはかなり異例。まさかインチキ宣伝ではないだろうから、プーチン大統領がホントにこう言ったのは間違いないのだろう。しかし、なぜ大統領がわざわざこんな発言を・・・？

◆本作のストーリー自体は、一方ではマチルダのしたたかさが顕著なのに対し、ニコライ2世の優柔不断ぶりが目立つ。「次期皇帝として、もう少ししっかりしてくれ！と思うのは父親だけではないだろうが、そこは、いくら身分が違うとはいえ、惚れた男の弱みだから仕方なし。もっとも、そんな皇太子たるニコライ2世を巡る“ロシア最大のタブーにして最大のスキャンダル”を映画にして何が面白いの？何の意義があるの？期待に反して、私にはそんな感想が強く残ったが・・・。

2018（平成30）年12月14日記